

〔行事記録〕

「帝国」的实践研究班主催合評会（社会思想史学会との共催）

「西 平等『法と力：戦間期国際秩序思想の系譜』 （名古屋大学出版会、2018年）を読む」

安武 真隆（「帝国」的实践研究班、主幹）

日 時：2020年10月25日（日）10：00～12：00

場 所：Zoom によるオンライン開催（「帝国」的实践研究班共同研究室よりホスト運営）

報 告：小田川大典（岡山大学）

三牧 聖子（高崎経済大学）

西村 邦行（南山大学）

西 平等（関西大学）

以下に掲載するのは、2020年度「帝国」的实践研究班が（報告者の一人でもある岡山大学の小田川大典氏とともに）企画し、2020年10月25日（日）に社会思想史学会のセッションIとして開催した合評会での報告原稿に、加筆修正を加えたものである。本企画の背景には、政治思想史研究において、初期近代における主権国家の枠組みを超えた越境現象や、複数の国際秩序構想への着目が高まっていること、さらに、かかる政治思想史研究の「国際論的転回」に呼応するかのよう
に、国際関係論や国際政治学では、国際関係の歴史的構築性や再帰性への着目が高まっていることがある。かかる研究状況の進展の下で、政治思想史と国際関係論との間にいかなる相互貢献の学際的關係が構築できるかが問われているのである。そこで本合評会では、「国際紛争は裁判可能なのか」という連盟期の最重要課題を軸に、法と力の関係をダイナミックに捉える諸学説の系譜をたどった西平等『法と力：戦間期国際秩序思想の系譜』を手がかりに、国際法学の中から「国際政治学」的思考が誕生した戦間期のモーゲンソーやE. H. カーの思想について検討した。

本合評会では、まず『法と力』の原型となる論考が掲載された『国際政治哲学』（ナカニシヤ出版、2011年）の編者、小田川大典氏（岡山大学）に本書の概要の紹介と論点提示をしてもらい、続いて『戦争違法化運動の時代－「危機の20年」のアメリカ国際関係思想』（名古屋大学出版会、2014年）等で知られる三牧聖子氏（高崎経済大学）、『国際政治学の誕生：E・H・カーと近代の隘路』（昭和堂、2012年）等で知られる西村邦行氏（南山大学）からも、それぞれの観点から本書について問題提起をもらった。最後に著者、西平等氏（関西大学、「帝国」的实践研究班研究員）からの応答を踏まえ、フロアも交え更なる討論を進めた。個々の報告・応答の内容については、以下に掲載された論考をご確認いただきたいが、フロアを交えた質疑応答の概要については、第45回社会思想史学会大会の「セッション事後報告」の「I 政治理論とインテレクチュアル・

ヒストリー」に詳しい (<http://shst.jp/home/conference/pastconferences/>)。本企画にご協力くださるとともに、ご寄稿いただいた報告者・討論者の先生方に、篤く御礼申し上げたい。

なお企画段階では、『国際政治のモラル・アポリア：戦争／平和と揺らぐ倫理』（ナカニシヤ出版、2014年）の編者でもある高橋良輔氏（青山学院大学）にも報告をしていただく予定であったが、氏の体調不良により、合評会開催直前に見送られた。その後、高橋氏は山崎望氏（駒澤大学）とともに『時政学の挑戦——政治研究の時間論的転回——』（ミネルヴァ書房、2021年1月）を公開されるなど今後の活躍が期待されながらも、2021年3月に帰らぬ人となられた。グローバル化による距離的近接性や空間共有による国際関係認識の変化に着目する高橋氏が、西氏の業績とどう交錯するのか、大いに期待されていただけに、誠に痛切の極みであった。高橋氏のご冥福をお祈りするとともに、政治思想史・政治理論と国際関係論との有機的な連携の中で、高橋氏の問題意識が引き継がれることを強く願う次第である。